

21世紀は木の世紀



iPodにも接続できる木のラジオ

「より少ない木材で、多くの仕事を」をコンセプトに、インドネシアの小さな村で生まれた木製品ブランド「マグノ」。木のラジオ(18900円)は、iPodやiPhoneとの接続も可能。木の時計(7980円)は、秒針がなく静か。



国産ヒノキを使用した携帯電話

NTTドコモは、四万七ヒノキの間伐材を使用した「タッチウッド」を今年3月に発売。間伐材の価値を引き上げることで林業を活性化し、日本の森を豊かにするのが目的。価格は7万7910円で、1万5千台の限定販売。

いままさら木でもないだろう。そう思った人は、木の底力を甘く見ている。内装材に使えば患者を癒し、子どもの活動範囲を広げる。工業製品を作れば、最新素材に負けない性能を発揮する。何より、森林は地球環境に計り知れない影響を及ぼしている。こんな大きなポテンシャルを持つ木を見直さない手はない。時代は「コンクリートと鉄の世紀」から「木の世紀」へ。

文：田中淳夫(責任編集)、吉田広子・形山昌由(編集部)



秋田杉で作った木製電気自動車

秋田の県立技術専門学校3校の生徒が共同制作。伝統工芸の曲げわっぱを作る手法を取り入れて木を加工した。フェアレディZをモデルにしたという。

スイスでは持続可能な森の利用を目指して、「近自然森づくり」が広がっている(背景写真提供:佐藤浩行)

一流企業を辞め、木工職人を目指す若者たち 震災をきっかけに、循環素材の木が脚光浴びる

サラリーマンを辞め、飛騨山奥の木工職人を養成する「森林たくみ塾」へ修行に来た若者たちがいる。入塾2日目から作品作りに没頭し、卒業までの2年間、ひたすら木工製品を作り続ける。遊び盛りの彼らが惜しみなく時間を注ぎ、気持ちを駆り立てる木の魅力とは何か。

大学で建築デザインを専攻して大手ゼネコンに入社した平井健太さん(27)は、日々の仕事に違和感を感じていた。「何もない所に顧客の求めるものを作る楽しさ」が好きで、建物のデザインが出来る意匠関連の部署を希望した。望みどおり配属され、オフィスビル、病院、学校などさまざまな分野の設計図を描いた。ショッピングセンターのイオ

ンモールも手がけた。

だが、何かしっくりこない。コスト優先主義から設計者の良心が施工に生かせないジレンマ。何より、顧客とコミュニケーションを取りながら、納得できるものを作り上げていく作業をするには、会社が大きすぎた。

「結局、頭でっかちだったのです。設計図は書けるけど、自分ではモノを作れない。そうなる現場の人たちに自分の主張を通していくことが難しく、すごく悔しい思いをしました。作れる技術を身に付ける必要性を痛感して、その結果、選んだのが木工でした」

徹底した実践型教育を導入したことで知られる森林たくみ塾の授業内容は、衝撃的だった。工作機械の使い方も教わらないうちから、どんど

んモノづくりをやらされる。

「初めの作業は、ベルトサンダーを使った面取りでした。入塾2日目にいきなり1200枚分をやってくれといわれて、それが何に使われるのかさえ分かりませんでした。とにかく必死にやりました」

驚きの連続の毎日だったが、木でモノづくりができる喜びから、平井さんは作業にのめりこんでいった。製作にかかわっているうちに、知らず知らず基本的な木工技能を修得していった。毎日が楽しくて仕方ないと、目を輝かせる。

平井さんは木の魅力をこう話す。

「金属、ガラス、コンクリートなどよりも加工性に優れ、どんな素材もかなわない経年変化の良さがあります。それに木は難しい。加工後も伸縮するし

曲がり続ける。それを想定しながらつくる奥深さがあります」

震災で消費行動変わる

久保洋人さん(27)は、カレNDERを製作する会社を辞めてここに来た。机に座り、商品の在庫確認をする毎日に物足りなさを感じていた。

そんなとき、先輩が森林たくみ塾で木工職人を目指しているの聞いた。話を聞いてみるとイキイキしていた。木を扱った経験は全くなかったが、自分も木工に懸けてみることにした。久保さんも木の難しさが、奥深さや魅力につながっているという。

「最初に焼印を押す仕事を任せられました。木によって香りが違うのはもちろんですが、焼印の押し加減も違うのです。個性があって一筋縄ではない魅力があります」

平井さん、久保さんの二人は卒業後、木工職人として生計を立てることを夢見ている。

入塾希望者は、一時の減少傾向に歯止めがかり、再び増えているという。今年に入ってから問い合わせ件数は、400件を超えた。卒業生の就職率は100%。ここで得た技術を使い、木にかかわる何らかの仕事をしている。

理事長の佃正壽さんは言う。



上・たくみ塾へ通うため、大阪から夫婦で飛騨高山へ移り住んだ平井さん
下・久保さんは「動いていたときには感じなかった人間味が木工では味わえる」という



上・たくみ塾へ通うため、大阪から夫婦で飛騨高山へ移り住んだ平井さん
下・久保さんは「動いていたときには感じなかった人間味が木工では味わえる」という